

発行日 2001年12月1日
発行元 株式会社
オリジン・コーポレーション
代表取締役：杉井保之
〒426-0044 静岡県藤枝市大東町777-1
TEL 054-636-4300 FAX 054-636-6187
E mail origin@shizuokanet.ne.jp

こおるま

そして、奇跡は起こった！

このところ私の周りにもずいぶん厳しい話が聞こえてきました。景気が冷え込み、デフレが進む中、本当に厳しい年末を迎えている方もたくさんいることと思います。私も「来年はどうなるか？」と考えると不安でたまりません。そんな時、私に勇気を与えてくれた本があったので、皆さんにもご紹介したいと思います。

その本は、「ほんの少しの間、目を閉じて、地球上で最も苛酷な場所を思い浮かべてほしい。」という文章から始まりました。

地球上で最も苛酷な場所はどこでしょう？ それは北極でも、赤道直下の砂漠でもなく「南極」なのです。

イギリスの威信をかけ、最も苛酷な場所「南極横断」に向かいながら、目的地である南極大陸にさえ到達出来ないまま遭難した「シャクルトン隊」の栄光ある失敗の記録が「そして、奇跡は起こった！」(評論社)です。

苛酷な氷の世界で船を失い、一年以上もの間、氷の上をさまよいながら乗組員28名、一人も欠けることなく、全員が生還したこの事実は、極限状態での「リーダーの在り方」や「生き残る組織の条件」を表していて、真冬の荒波の中、必死に舵を取っている多くの経営者(リーダー)達に、大きな示唆と勇気を与える一冊だと思えます。

私は、こうした不況期を乗り越える最大のポイントは、「リーダー・シッフ」と、皆が思いを一つにする「明確な目的(理念)」だと思っています。それがあから我慢も出来、無理も効くと思うのです。実際、シャクルトン隊においても、そうであったようです。

南極に出発する前、隊長について質問されたある隊員は、シャクルトンについて「あの人は立派な人だ。部下を危険な目に合わせるようなことは出来る限り避ける。しかし、どうしても避けられない危険があるときには、賭けてもいいが、あの人は先頭に立っても向かっていく人だ。」と語っています。

また、小さなボートで、荒れ狂う南氷洋を1,300キロ渡り、歩いて海拔1,200メートル以上もある氷のアルプスを越えることが出来た理由をシャクルトンは次のように述べています。

「疲れ果て、空腹で雪の中を歩いていると、眠ることさえ出来れば何もいらぬという気持ちになるものだ。それでも我々を前へ前へと突き動かしてくれたものは、『どうしても仲間を救いたい』という焼け付くような思いだった。もし、自分だけのことを気にしていたら、きっと結果は違っていただろう。私は隊長であり、私を信頼して待っている仲間がいる。彼らを思うと、どれほど苦しくても前へ進まなくてははいけなかった。」

こうした思いを持ったリーダーにとって、隊員を迎えに行ったら隊員から送られた

「ボス、あなたなら戻って来てくれると信じていました。」

という言葉は、何にも勝る賛辞だったことでしょう。

前途に希望が見えにくい日々の中にあっても「あきらめるな!」「生きのびろ!」という、この本のメッセージは多くの人に大きな勇気を与えることでしょう。

私も不安で目的地が見えなくなることがよくありますが、どんな時も、目的を確認して歩いていきたいと思っています。結果は、誰にもわかりませんが、私には守りたい人達がいる、私はリーダーなのです。最後の最後まであきらめずに工夫し続け、誠実な努力することこそが、その人達に対する私の誠意だと思うのです。

今の時代、経営者に限らなくても、目的を見失って苦しんでいる人は多いと思います。しかし、多くの場合『努力が辛い』のではなく、夢がないのが辛いのだ』と思います。そんな時は、大切なものを確認し、仲間と夢を語り合って、歩き続けましょう!

彼らの乗った船の名は、「エンデュアランス(不屈の忍耐)号」という名前でした。

☆☆ お便りコーナー ☆☆

内親王のご誕生、良かったですですね。暗いニュースが多い中、日本中を明るくしてくれた気がします。新聞によると「敬宮愛子」さまの命名の由来は、「孟子」の中の「人を愛する者は、人から愛され、人を敬う者は、人から敬われる」から来ているそうですが、日本に大切なことは何かを示していただいた気がします。私も、つい頑張ってイライラしたり、ギスギスしがちですが、本当は人に愛されたり、尊重されたかったのだという事を思い出した気がします。

講演ありがとうございます。杉井さんの「苦しい経営状況の中でも、お金を借りない。手形を切らない(割らない)」。振込料を引かないということを一貫するためには、本気で考えなくてはならなかった」という話が心に刺さりました。特に、「自分がもらったとき切なかったから、絶対に振込手数料を引かないようにした」という話は、本当に驚きでした。そうしたところに理念が現れ、会社を作るんですね。私には、そうした理念(意地)がなかったように思います。ここからがスタートです。

先月、社員旅行でグアムに行ってきた。

ニュースでは聞いていましたが、これまで見たことがないほど街が閑散としていて、多くのお土産物屋さんが店を閉めていました。地元の人に聞いてみると、テロ以来、観光客は通常時の5分の1になってしまったそうです。観光に収入のほとんどを依存しているグアムやハワイにとって、テロの影響は、日本で私達が思っている以上に深刻なものでした。

ところが今回グアムに行ったら最も驚いたことは、そうしたテロの影響ではなく、そうした不況の中、島の人達が実にのんびりと暮らしていたことです。

私が「どうして平気でいられるの?」と聞くと、「ジタバタしても、ない物はないんだから、出来る生活をするしかないでしょ!」と答えてくれたのですが、これが日本だったらどうなるでしょう?

私なら「何とかしなくては!」と力が入り、ピリピリしてしまうかもしれません。

グアムの方達のように、受け入れてしまうことが良いことかわかりませんが、私達日本人は、豊かな生活に慣れ過ぎて、現実を受け入れる事が苦手になっているのかも知れませんね。

先月号の「天国と地獄」でも書きましたが、苦しい状況におかれても、おだやかに暮らすことも出来るということを見ることが出来、とても勉強になりました。

昔の言葉に「貧すれば鈍す」という言葉がありますが、疲れたとき、苦しいときこそ、真価が問われるのです。

そんな時こそ、凜としていたいものです。

「The 親父」出版
1995年に多摩大学名誉学長野田一夫様、アサヒビール樋口廣太郎様、作曲家三枝成彰氏らを中心に「親のあり方」を考える「親を考える会」が設立され、今回、その三冊目となる「The 親父」が、KKロングセラーズから出版されました。
森前首相や鳩山民主党代表、瀬戸アサヒビール会長、速水日銀総裁、湯川い子さんなどといった各界を代表する方々に交じり、私も父への思いを紹介させていただきました。私の内容は大したものではありませんが、他の方々の文章からは多くのことが学べると思いますが、この本の印税は、すべて青少年育成のための「ありがとう基金」に寄付されますので、もしよろしかったら是非ご購読下さい。
今回、この本に載せていただくことで、父のことを内観する機会を得ると共に、私にとってとても良い思い出がまた一つ出来ました。ご紹介いただいたボンボヌール社長近藤昌平様には、心からお礼を申し上げます。